



ハイライトよねやま139

1 寄付金速報 — 10月は米山月間 —

9月までの寄付金は前年同期と比べて6.7%減、約2,400万円減少の3億3,500万円となりました。普通寄付金が1.7%減、特別寄付金が13.4%減と、出足の悪かった普通寄付金が前年度並みに戻りつつあります。前月号でもご案内しましたが、普通寄付金も税制優遇の対象となっていますので、領収証をご希望の場合には申請期限の10月末日までにデータをご提出ください。

10月は米山月間です。10月から12月までの3カ月は、1年間の特別寄付金の約半分をご送金いただいている重要な時期です。月間用資料をご活用いただき、当会事業への理解を深め、更なるご支援をよろしくお願い申し上げます。

2 GETSで米山奨学事業を紹介

9月8日に都内で開催されたガバナーエレクト研修セミナーで、板橋敏雄理事長と坂下事務局長が40分間、米山記念奨学事業の現況説明を行いました。また、配偶者プログラムでは、DVD「素晴らしい贈り物」12分版を上映後、米山学友2人がスピーチをしました。

ネパール政府の公式通訳者であり、テレビのコメンテーターとしても活躍中のジギャン・クマル・タパさん(ネパール/2008-09/横浜たまRC)は、来日して直面した苦労話やネパールの教育事情、米山奨学生となって得たロータリーとの絆について、時に笑いを誘いながら聴衆を惹きつけました。母国の子どもに絵本を贈り、女性の自立支援活動に携わるチャンタソン・インタヴォンさん(ラオス/1983-86/東京銀座RC)も、「今、私がこうした活動を頑張れるのはロータリーに出合ったおかげ」と力説しました。2人のスピーチ後は活発な質疑応答がなされ、「もっと話を聞きたかった」と、名残を惜しむ声が聞かれました。



質疑応答に答えるタパさん(左)チャンタソンさん(右)

3 米山月間にご活用ください

米山って何? 寄付の成果は? 米山奨学事業をロータリアンにご理解いただくためには、奨学生・学友の声を直接お聞きいただくことが一番ですが、米山月間資料として全クラブにお送りした資料に加え、下記の資料をお使いいただけます。

★映像で! ホームページから視聴できます。ご要望があればDVDをお送りします

ラインアップ

- 駐日韓国大使として活躍する米山学友、権哲賢氏特別インタビュー (14分)
- 学友の活躍を紹介「心つないで、世界へ」(15分)
- 学友が語る母国の女性の自立支援 (13分) ほか

★パワーポイントでプレゼン! HPからダウンロードできます。説明者用メモ付き。

★新ポスター 10月20日頃、ガバナー事務所宛てに送付。在庫がある限りクラブからも注文可能(無料)

★バナースタンド 巻き取り式でコンパクト収納。8,000円。注文から1週間ほどで納品できます。



4

台風被災地でボランティア活動 — 第 2640 地区 —

台風 12 号によって、大きな被害の出た第 2640 地区（大阪府南部・和歌山県）、「現地で少しでも役立ちたい」と同地区学友会から声が挙がり、9 月 24・25 日の 2 日間、奨学生 10 人と地区米山委員会メンバーら 9 人が被災地に赴き、浸水した家屋のふき掃除や家財の運び出しなどのボランティア活動を行いました。



参加した奨学生の一人、中国出身の曲航萍さん（富田林 RC）は、「被災地の様子を実際に見て、非常に心が痛みました。これからの生活はとても大変だと思うので、少しでも力を貸したい。希望を伝えたい」と語りました。また、ともにミャンマー出身のピューピューテッコさん（貝塚 RC）とピョピョウエーさん（関西国際空港 RC）は、「ロータリアンの皆さんに教えていただいたのは、人と人が助け合う精神。片付けたお家の方から、笑顔で『ありがとう』と言われたときは、思わず涙がこぼれるほど感動しました」と、揃って感想を寄せてくれました。

同地区米山奨学委員長の谷野一彦氏は、「今回、学友会の学生たちから申し出てくれたことがとても嬉しく、彼らの気持ちを形にしたいと思いました。参加した奨学生は皆、一生懸命がんだり、達成感を感じたようです。今後の活動にもプラスになるでしょう」と、語っています。今回の活動は、9 月 27 日付の地元紙・熊野新聞の一面に掲載され、紹介されました。

5

10 年の絆を育て — ジャンチブ・ガルバドラッハさん —

10 月 7 日、山形市内のホテルで「モンゴル国際フォーラム」（主催：山形北 RC）が開かれ、かつて山形北 RC の米山奨学生だったジャンチブ・ガルバドラッハさんと、彼が母国に設立した「新モンゴル高校」の卒業生 8 人が、それぞれの夢や日本の留学生生活を語りました。

ジャンチブさんが米山奨学生だったのは 1998～99 年。「モンゴルに国際標準の 3 年制高校を作りたい」という彼の夢を、山形北 RC を中心に多くの一般の人が「柱一本の会」の会員となって支援し、2000 年に新モンゴル高校が設立されました。10 年が経った今、屈指の私立高校へと成長しています。「ジャンチブは今でも皆の気持ちを胸に頑張っている。10 年の節目を迎えて、われわれとの絆がまだしっかりとあることを確認し、柱一本の会に協力してくれた人たちや、当時を知らないロータリアンに、その後のことを知ってもらいたい」と、この企画を発案した酒巻満会員は言います。会場には柱一本の会の元支援者や地元の高校生など約 120 人が集まり、熱心に



耳を傾けました。

「新モンゴル高校はすでに“良い学校”ですが、今後は“偉大な学校”にしたい。偉大な学校とは、卒業生一人一人が人類のために尽くし、幸福な人生を送る人間になること。私は“人”の懸け橋を作りたい」と、ジャンチブさんは今後のビジョンを語りました。

スピーチした卒業生の一人、映画監督にな

る夢を持って桜美林大学に通うゾルジャルガルさんは、「私がここに立っているのは皆さんのおかげ。皆さんは、ジャンチブ先生の学校を作る夢を応援してくれただけではなく、私を含め卒業生の夢も応援してくれた。そのことを毎日、心から感謝しています」と述べ、ジャンチブさんへの支援が若い世代の夢を育て、何倍にも広がり開花していることを感じさせました。この日の夜、8 人の卒業生たちはそれぞれ山形北 RC 会員の自宅にホームステイし、新たな絆を育みました。